真剣な眼差しだった。
僕も、真面目に彼女を見たが、それ以上、
僕は何もできなかった。
結局、バスが来て、後ろから押されながら、
僕はいやいや、前の人についてバスに乗った。
人ゴミに流されて、人ゴミに身を隠し、
安心している自分が、ものすごく卑怯で、嫌いになった。
しかし、僕は、バスに大勢の人と一緒に、
毎日、電車にゆられ、バスに乗らねばならない。

あの時、まわりに人ゴミがなく、
あの人の前で、僕一人なら、
当然、僕には逃げ場がなく、
もっと、男らしく、彼女に面と向かって
行動が取れたはずだ。
ああ、また、僕は卑怯にも、ここで他人のせいにする！

僕は、はげしいクラブ活動と、悩みごとで、
夜、寝つくのが遅くなった。
それでも、午前二時ごろには、起きて勉強した。
毎日が、睡眠不足ぎみになった。
睡眠が、夜八時すぎから二時までの、
六時間足らずの日が多くなった。

108 はずかしい気持ちを隠した・・・・・・・・・・・・・・・・474

萩原良昭